

安西冬衛全集

第一卷

安西冬衛全集

第一卷

宝文館出版

安西冬衛全集 第一卷

昭和五十二年十二月二十日 第一刷發行

著者 安西冬衛

編者 山田野理夫

發行者 羽生和男

發行所 寶文館出版株式會社

東京都千代田區神田神保町三ノ一七
郵便番號一〇一

振替東京五一二八〇

電話〇三(二六一) 四四〇九

印刷所 中臺整版
製本所 大光堂

©1977 Misaho Anzai

Printed in Japan

0392—001142—7715

目次

軍艦茉莉

安西多衛君について（北川冬彦）

1

軍艦茉莉	18
閩人獨氏	20
新疆の太陽	22
勳章	23
眞冬の書	24
暮春の書	25

庭	27
誕生日	28
再び誕生日	29
澄める町	30
戦役	31
春	32
春	33
日食	34
Khan	35
退却	36

海	54	秤	41
春	53	輪廻	40
あの道	52	物	39
シルクハットのある卓布	51	十年	38
村	49	掩護陣地	37
犬	47		
徳一家の lesson	44		

2

肋子	70	曇日と停車場	56
		蝙蝠傘のあるタブロー	58
		理髪師	59
		Call	60
		午餐會	62
		春	62
		自由亭	63
		開港場と一等運轉士と Jampoa	64
		普蘭店といふ驛で	65
		室	66
		徳と法	67

3

肋大佐の朱色な晩餐會	72
黃河の仕事	74
養狐會社の書記	76
向日葵はもう黒い彈藥	77
骰子	79
百年	80
途上	82
曇日と停車場	84
犬	86
マルヌの紀念日	87
騎兵	88
門	89
エスキース	90

タンポポ	92
民國十五年の園遊會	93
櫛比する街景と文明	97
陸橋風景	98
夜行列車	99
門	100
河口	101
雪毬花	102
藍刀	103
石油	104
土耳其	105
興亡	106

亞細亞の鹹湖

政治は家具に包圍されてゐる

三つのもの 148

二つの河の間 150

政治は家具に包圍されてゐる 151

平和と戦争 152

商賣敵 153

畢生の冒險 154

老いた亞細亞の若い鹽

翼ある仕事 156

ばん屋の兵 159

膠 161

マラソン選手 兵 163

渴ける神

軍艦肋骨號遺聞	167
八面城の念力	172
怒る河	176
蟻走痒感	179
オルドスの幻術	184

汗の亡霊	191
幻	199
黒き城	202
三つの天幕	209
毒	214

大學の留守

大學の留守

大學の留守	222
下市口にて	224
定六	226
韃靼海峡と蝶	229
再び韃靼海峡と蝶	231
墮ちた蝶	233
測量艦不知奈	235

美しき日本の冬の夜の設計	237
燕とアスファルト	239
未だ多	241
約拿紀行	243
土匪の出る列車	247
赤と黒	250
老いた鹽	252
遊隋の城	254
沼べり	257
悪	263

食物を運ぶ	284
沙漠の行者が臥てゐると鴉が	283
鴉	281
闕典	279
轉經	278
左袒	277
玄い石	275
黒業と晝貌	274
臥せる拳闘家 坐せる闘牛士	273
海	272
金と銀	271
迷宮	269
ププの宇宙	267
梅雨	264
爐ほこりに渴くわが神	

北

偉大な料理人の一粒の鹽	288
政治上多少の陷穽	294
黄ろい急行列車で智利へ	296
權謀と術數	298
包圍	300
廢語	301
祖述	303
活佛	304
贗造の佛陀と四十一人の佛弟子	310
契約の櫃	311
蛙	312
輕便鐵道	

畢生の冒險	313	蝶と腸詰	321
キニーネを喫む男	314	赤い圖星	323
一蝶類蒐集家の公理	315	四行倉庫の抜穴は英吉利の陣地に	
腎と肝	316	續いてゐる	324
赤い山	318	北	326
黄ろい眼	319	輯後	341
後記	343		

軍艦茉莉

安西冬衛について

少くとも安西冬衛の場合は、文學がコンソレーションであることを示す最も明かな場合の一つである。彼の文學への動機が、その一脚の喪失によつて急轉直下したのは眞實である。一本の脚はまさに彼のポエジを築き上げたのである。一本の脚がこんなにも有能な肥料であることも珍らしい。これは、彼の強靱なエスプリによらなくては能はぬことだ。これは強烈な彼の意欲なしでは不可能事に違ひないのである。彼は、森羅萬象を呑み下す。そして忽ち消化して了ふ。ウワバミの意欲である。だが、流石の彼も手古摺るときがある。それは、うつかり彼が思想を嚥下した時だ。彼は磨滅する。そして輝かしさが、「稚拙感」となつて發する。安西冬衛の稚拙感ほど愛すべきものを僕は知らない。安西冬衛は現代の隠士である。現代の隠士の夢ほどまた奇怪なものはない。彼が何處まで墮ちてゆくのか、僕には豫測がつかない。何故なら、彼は脊負ひ切れないほどの業を脊負つてゐるからである。人間の惡徳は人間を神々しくする。安西冬衛はやがて神化するであらう。

昭和四年四月

北川冬彦

bio-bibliographie

- ・明治三十一年三月九日 奈良市水門に生る。東大寺の境内なり、家は代々岸和田藩士。
- ・後東京に移り富士見幼稚園、麴町小學校に通ふ。日露戦争、日比谷公園で東郷大將の凱旋を迎ふ。
- ・明治四十年父の轉任とともに大阪堺に移る。大阪府立堺中學校を卒業、以後十年間デッサンを研究す、俳句といふ形式で。
- ・大正九年父に従ひ、大連に來る。
- ・昭和二年「亞」を了る、通刊35號。